

トレーシングペーパーでなぞれば書き取りにも強くなる

「うちの子供は、漢字の書き取りテストの点数が悪いんです。何度も書いて覚えるしかないんだから、五回書いてダメなら、十回書きなさいというんです。それで、漢字というとうんざりしてしまって、ますます嫌いになっていくようで心配です。漢字の勉強が好きになる、何かいい方法はないでしょうか」といった内容の相談を、親御さんから受けることがよくあります。

子供にとって、ただひたすら書きなさいといわれるのは面白くも何ともなく、単にマスを埋めることが目的になるのは容易に想像できます。これではやはり、「漢字を書けるようになる」ことが好きになったり、得意になったりするのなかなか難しいでしょう。

先に述べたように、漢字を読むのと書くのでは、脳の働く経路が異なり、漢字を書くときは読むときのように、「目にする」「意味を理解する」という具合に、すんなりといかないのが現実です。

漢字を書くときは、書こうとする漢字を「音でとらえる」それを「目に見える形にする(全体像をとらえる)」「漢字に組み立てる」

「手の動きの記憶につなげる」という複雑な経路をたどることになります。

「花」という漢字を書くためには、「はな」と音でとらえ、それを「花」という形の全体像にして、改めて「“艹”と“イ”と“匕”」として組み立て、“一 艹 𠂇 𠂇 花”の書き順(手の動き)を思い出すことが求められるわけです。

つまり、読めること、字形を全体的にも部分的にもとらえていること、それを手で表現できること、こうした条件が揃わなければ書けるようにならないということです。

ですから、「漢字を書く」ためにも、漢字を読む力をつけることがたいへん重要になります。そして、漢字を読むことによって、漢字を目にする機会がそれだけ多くなっていけば、おのずと字形をとらえる力をつけることができます。

また、解字、すなわち漢字の成り立ちを学ぶことで、漢字の組み立てに強くなることができます。

そのうえで、実際に何度も手で書く練習を重ねて、手の記憶に強く残すことが必要です。漢字を見ているだけでは、読めるようにはなっ

でも、書けるようにはなりません。

手で書く練習にしても、“たいくつな作業”と決めつけるのは早計で、子供たちが喜んで試みる学習法があります。それは、美しく書かれた漢字の上に、透けて見えるトレーシングペーパーを乗せ、鉛筆などでなぞっていくものです。なぞっただけとはいえ、自分の筆跡が美しい漢字を描き出すのは、子供の心をことのほか喜ばせ、得意にさせます。「先生、もっと書きたい」といって、子供は何回でもやりたがります。楽しみながら、漢字を書く練習ができるのですから、子供にぜひ、このやり方を教えてあげてください。

市販されているものに、漢字の字形を点線で描いたものをなぞらせるようにした漢字練習帳がありますが、これは書き終えたあとで見ると、点線からところどころはみ出していて、あと味がよくありません。トレーシングペーパーで写し書きしたときも、はみ出しているのですが、手本からトレーシングペーパーを離して見ると、はみ出したところが見えないので見た目がよく快感がわいて、もっと書きたくなるのです。同じようでも結果は大違いです。

私はつねづね、小学校低学年ぐらいいまではとりわけ、漢字の学習

は「読み」に重点的に力を入れ、「書く」ことにはあまりこだわらないほうが良いと言っています。これぐらいまでの子供に、人の顔を見せて、絵に正確に書いてごらんと言っても、そうそうできるものではありません。漢字を書くことは、それぐらい難しいとっていいでしょう。ですから、「書く」ことは、「学年別配当漢字」に基づいて徐々にマスターしていけばいいのです。

それよりも家庭において、比較的無理なくマスターできる、漢字の「読み」の学習を学校に先行してどんどん進め、それにともない、本をたくさん読んで、本の面白さに目覚めるようにすることのほうが、生涯にわたる学力や教養の基礎を築くためにたいへん有効といえます。

加えて、パソコンの普及などにより、漢字を書くことは変換機能が代行してくれますが、その前に、音が同じ漢字がずらりと羅列されるわけで、どの漢字が適当か選択するためには、同音の漢字が識別できなくてはなりません。その意味でも、漢字の「読み」は重要です。こうしたいくつかの点こそ、私が、漢字の「読み先習」にこだわるゆえんです。